本会顧問　京都大学名誉教授　西田直二郎博士訃

昭和三十九年十二月二十六日午後九時、西田直二郎博士は、七十八年の生涯を閉じられました。この数年、眼疾につづく内科の疾患のため御療養中でありましたが、今一度お元気なお姿に接したいという私どもの祈りも空しく、ついに不帰の途に歩まれたのであります。

博士の生涯は、まことに史学界の泰斗と呼ぶにふさわしい生涯であったと申せましょう。大正、昭和の二代を通じて京都の国史学を背負われたことはもとより、博士によって樹立された文化史学の方法は、ひろく日本の、いな世界の史学界を風靡いたしました。そして博士の哺育のもとに、幾多の俊才が競いたちました。しかし、博士が不帰の旅路に進まれた今、さながら京都の森の巨木がその生命の限りをつくして倒れた空白と寂漠の大きさを、感じるのであります。

博士は明治十九年十二月二十三日、大阪府東成郡清堀村において、父弥三郎・母たねの二男に生れられました。東平野町私立淇澳尋常小学校、東平野尋常高等小学校、大阪府立天王寺中学校、第三高等学校を経て、京都帝国大学文科大学史学科に進まれ、明治四十三年史学科国史学専攻の第一回として卒業されました。ひきつづき大学院に入学、大正八年京都帝国大学助教授となり、大正九年より十一年までイギリス、ドイツに留学、帰朝ののち大正十三年教授となり、昭和六年、三浦周行博士逝去ののちは、京都帝国大学の国史学を主宰し、史学科の中心として活躍されました。一方大正七年いらい京都府史蹟勝地調査会委員として、京都史蹟の研究に尽力され、また国史関係の各種の委員を兼ねるなど、後

進指導のかたわら、まことに精力的に活躍されました。わが史学研究会はほぼ博士の研究歴にひとしく明治四一年創立し、「史林」は大正五年に創刊になりますが、三浦周行博士をたすけて委員として、創刊間もなき本誌の編集と運営に尽力され、ついで評議員として本会の発展のため労をおしまれませんでした。そして、「平安朝の文化と庶民階級」（三巻三・四号）はじめ珠玉の論考を寄せられました。本会の今日の隆盛にとって、博士の存在はまことに大きいのであります。昭和二十九年、本会に名誉会員制を実施するとともに第一に博士を推し、昭和三十七年改組ののち顧問に推挙いたしましたのも、博士の功労に何ほどかでもお報いせんがためでありました。

半世紀にわたる博士のご業績を簡単にふりかえることは、容易なことではありません。博士のご業績は、原始日本のトーテミズムの問題から、近時の歴史教育の問題にいたるまで、文字通り日本全史におよぶ幅広いものでありますが、その間をつらぬく太い一本の線は、いまさら累言するまでもなく、博士によって創始された「文化史学」の方法であります。博士が大学院に入学するとともに日本文化史を研究題目とされ、爾来二十二年間の研鑽をへて、昭和七年『日本文化史序説』を世に問われました。その第一篇において、博士の独創になる文化史学の理論と方法が述べられ、第二篇で日本文化の展開過程が、右の理論を駆使して、具体的に解明されています。この一著こそ、すでに多くの論者によって史学史上の評価と位置づけがなされているように、日本の近代歴史学の最高の到達点を示すものであります。

この輝かしい光茫のもとにかくれて、地味ではありますが今一つ、博士の顕著な御功績として特筆いたすべきものに、京都史蹟の研究があげられます。少年の日から、「声こそたてないが、人間に感興の深い物語をする」史蹟に囲まれて育ち、「そして京都の第三高等学校に入学する前から京都の史蹟を見ることを、いかに心の愉しみとしておったか」といわれておりますが、ここに博士の学風を支える今一つの柱があったと申せましょう。そして大正七年、京都府史蹟勝地調査会委員になられてからは、梅原末治博士、のちに赤松俊秀博士らとともに、まことに精力的に京都市内外の史蹟を踏査され、その成果をつぎつぎに発表せられました。それは最近『京都史蹟の研究』と題して一本にまとめられてありますが、博士の尽力によって明らかにされ、また適切な保存の途が講ぜられるにいたった史蹟は数多く存するのであります。文化財保存の要が強く叫ばれている今日、いち早くその必要を痛感され、実行された先生のご功績の大いさをあらためて深くも思うのであります。

十二月二十八日、博士の教え子の一人竹田聽洲氏が住持する百万遍山内寿仙院において、葬儀が行なわれました。受業生一同、茶道両家元、そして教え子の一人ライシャワー米大使などの供花によって祭壇は装飾され、博士の知友清浄華院法主石橋誠道師を導師に、五百余名の参会者に見守られて、しめやかに厳粛にそして盛大に、学究の最期にさもふさわしくとり行なわれました。法名は願蓮社向誉誓信直二上人。

京都の森の巨木は倒れたとはいえ、その学風を、より豊かに継承して、幾多の俊才が生々と育ちつつあります。今はただ、在天の博士が、安らかに見守られんことを祈念して、訃報といたします。（遺影は、博士の還暦記念事業にさいし、堂本印象画伯によって画かれたものであります。）

（熱田）

西田博士略歴

明治一九年一二月二三日　大阪府東成郡清堀村三三番屋敷において誕生

明治四〇年　三月　第三高等学校第一部甲を卒業　九月京都帝国大学文科大学史学科入学

明治四三年　七月　右同卒業　引続き大学院入学

大正　四年　九月　京都帝国大学文科大学講師を嘱託せらる

大正　七年　四月　京都府史蹟勝地調査会委員（爾後二十余年その調査に従事）

大正　八年　二月　大西祝長女道と結婚

六月　京都帝国大学助教授に任ぜらる

大正九年五月～大正一一年一二月　ケンブリッジ大学・ベルリン大学等に留学

大正一三年　五月　文学博士の学位を受く　論文題目「王朝時代の庶民階級」

九月　京都帝国大学教授に任ぜらる（国史学第一講座）

昭和　三年　七月　京城帝国大学講師を嘱託され出講

昭和　八年　三月　蘭領東インド諸島へ出張

五月　高等試験臨時委員（爾後昭和一八年まで殆んど連年）

昭和　九年　二月　国民精神文化研究所員を兼任

四月　日本古文化研究所理事に就任

昭和一一年　九月　日本諸学振興委員会常任委員を嘱託せらる

昭和一二年　八月　勲三等に叙せられ瑞宝章を授けらる

昭和一三年　三月　京都帝国大学日本精神史講座（新設）を兼担

七月　従四位に叙せらる

一一月　京都帝国大学文学部長に補せらる
一二月　高等官一等に陞叙せらる
昭和一五年　一月　宮中御講書初において「日本書紀神武天皇即位元年橿原開都条」を進講
昭和一六年　三月　中華民国に出張
昭和一九年　八月　勲二等に叙せられ瑞宝章を授けらる
昭和二一年　六月　教職不適格に指定　七月右により退官
昭和二六年一〇月　教職不適格解除
昭和二七年　二月　京都大学名誉教授となる
四月　京都女子大学教授となる
一二月　滋賀大学教授となる
昭和三三年　三月　滋賀大学教授を免ぜらる
昭和三八年　三月　京都女子大学教授を退く
昭和三九年一二月二六日　老衰と震顫麻痺のため死去
昭和四〇年　一月二二日　従三位を追陞せらる

西田博士主要著書目録

日本文化史序説　改造社　昭七・二
京都史蹟の研究　吉川弘文館　昭三六・一二
日本文化史論考　吉川弘文館　昭三八・一二
〈校訂〉満済准后日記巻一―三　京都帝国大学文科大学叢書大正七～九
〈編集〉元寇史料集　国民精神文化文献　昭一〇・三
〈編著〉立入宗継文書・川端道喜文書（柴田実と共著）　右同　昭一二・三
〈編集〉後醍醐天皇宸翰集　右同　昭一二・三
〈監修〉国史資料集　第・一二・三巻　右同　昭一二～一八
〈監修〉宸影光輝　京都市　昭一五・一
〈監修〉京華聚英　京都市　昭一五・三
〈監修〉京都市史編年綱目　一～三、地図編　京都市　昭一九～二三
洛西花園小史（向井芳彦と共著）　積善館　昭一八・二
洛南大住村史　田辺町役場　昭二六・四
中学国史通記　積善館　昭一三・一一